

第2回下羽田遺跡現地説明会資料

	遺跡周辺の歴史	今回の調査地の変遷
縄文時代	紀元前10000年 草創期～後期	縄文時代の始まり 下羽田遺跡で狩猟活動行われる。 (縄文時代草創期・昭和62年調査地出土有舌尖頭器)
		 木が茂り、北風で多くの木が倒される (風倒木痕) の時期 (縄文時代晚期以前)
	紀元前400年 弥生時代	下羽田遺跡で集落が営まれる。 (縄文時代晚期・昭和54年調査地検出土器棺墓)
		  竪穴住居・掘立柱建物、墓で構成される集落が作られる。 (縄文時代晚期末)
	250年頃 前期	古墳時代の始まり 下羽田遺跡で集落が作られる。 (昭和62年調査地の竪穴住居など)
		 竪穴住居などの集落が作られる。 (古墳時代前期)
	400年 中期	雪野山古墳が造られる。 近江八幡市千僧供古墳群・東近江市 (旧蒲生町) 木村古墳群で古墳が造られ始める。
		 竪穴住居にかまどが導入される。 (古墳時代中期)
	500年 後期	雪野山や瓶割山・岩倉山で群集墳が造られ始める (倉橋部古墳群・上平木古墳群など)。
		下羽田遺跡でかまど付竪穴住居が一般化する (古墳時代後期～飛鳥時代)。
古墳時代	飛鳥時代	下羽田遺跡で竪穴住居から掘立柱建物に建物が変化する (奈良時代以降)。
	710年 奈良時代	平安京へ遷都
平安時代	794年	掘立柱建物が作られる。 土器廃棄遺構や石敷遺構も作られる。 (奈良時代末から平安時代)
		調査地周辺が田畠となる。 (素掘り溝群・平安時代以降)

平成23年2月27日(日)

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

1. 下羽田遺跡の位置と周辺の調査

下羽田遺跡は東近江市下羽田町から上平木町にかけて位置しています。遺跡の東には岩倉山・瓶割山、西に雪野山の北端にはさまれ、白鳥川を始めとした小河川が多く集まり、水の豊富な地域として、古くから水稻耕作等に適した地であったと推定されています。

これまでの調査では、今回の調査地の南側で昭和 54 年度に行われた滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会の調査で、縄文時代晩期末の土器棺墓（どきかんぼ）や木棺墓（もっかんぼ）などが確認され、今回の調査地の西側で昭和 62 年度に行われた旧八日市市教育委員会の調査では、古墳時代前期から飛鳥・藤原時代までの竪穴住居群や飛鳥・藤原時代以降の掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）などが見つかっています。また、昨年度の調査で、古墳時代前期から中期にかけての竪穴住居 10 棟と古墳時代前期の土坑墓 13 基、奈良時代末から平安時代初頭の掘立柱建物 4 棟以上、土器廃棄遺構 1 基、平安時代の石敷遺構 1 基、時期不明の井戸 1 基、河道跡などが見つかり、連綿と集落が営まれていたことがわかりました。

2. 発掘調査の成果

(1) 今回の調査区の概要

今回の発掘調査は、昨年度より継続して浄化池工事計画に伴う調査として実施しています。発掘調査は現在も継続中ですが、今年度調査対象地（面積 4,540 m²）で縄文時代晩期から鎌倉時代以降の遺構や遺物が見つかりました。古墳時代から鎌倉時代以降の遺構には、耕作関係の素掘り溝群や調査区の南端付近で掘立柱建物の一部が確認されていますが、主に縄文時代晩期末（約 2,400 年前）の集

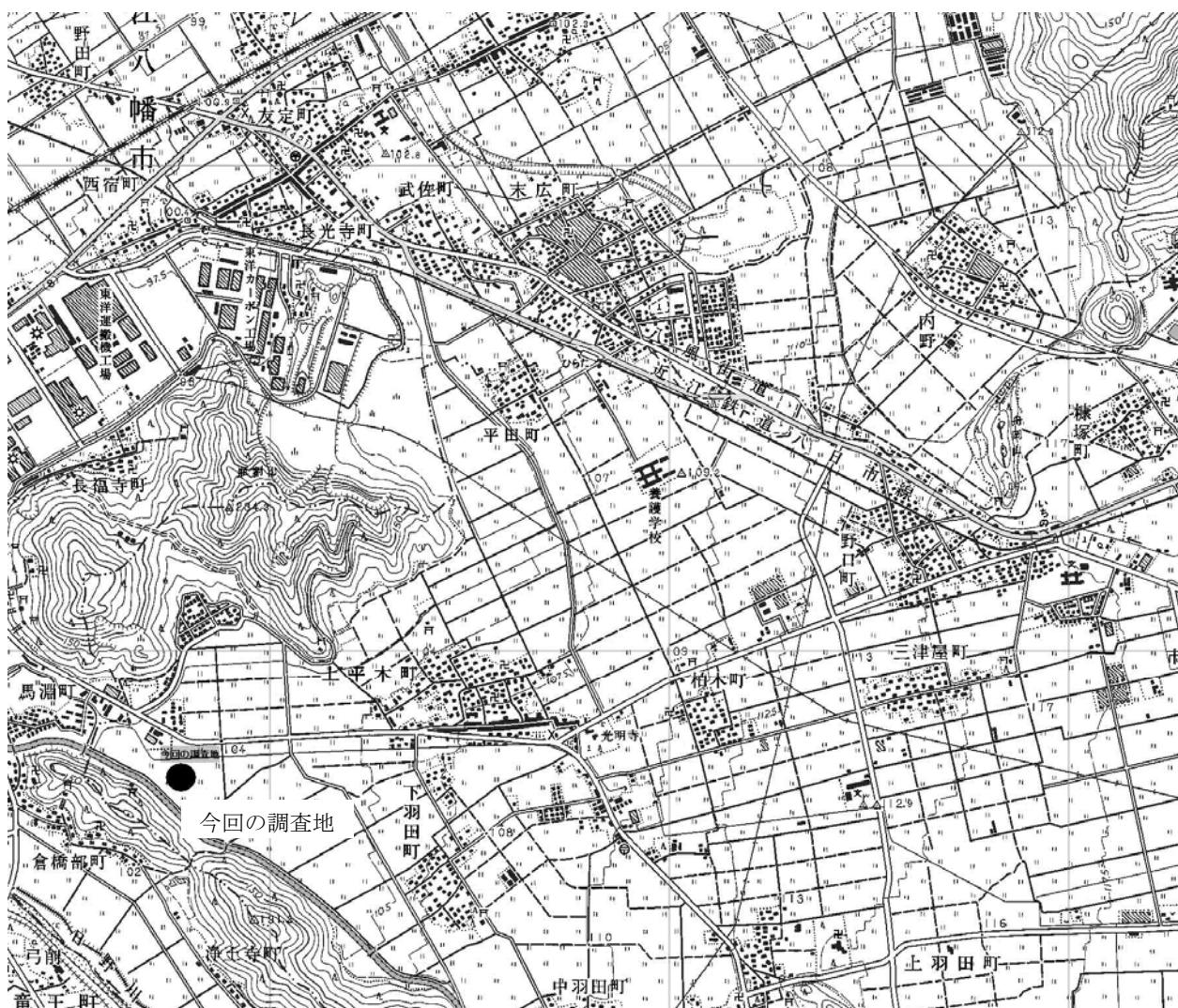


図 1 遺跡の位置 (1/25,000)

落跡が中心となります。縄文時代晩期末の集落は、竪穴住居や掘立柱建物などの居住域に隣接して土器棺墓や土坑墓などの墓が配置されています。集落の規模や居住域と墓の関係を知ることができますと共に、竪穴住居と掘立柱建物で構成される居住域の発見は、近畿地方で初めてです。

(2) 縄文時代晩期の遺構と遺物（図2）

1. 竪穴住居（写真1）・・地面を半地下式に掘り窪めた底を床とし、そこに炉を設置し、上部に屋根を葺く建物。

全体で6軒見つかっています。鎌倉時代以降の耕地化（水田・畑など）により大きく削られており、そのうち4軒は掘りこみが残存せず、柱穴のみか、炉と柱穴が見つかっています。大きさが推定できる竪穴住居は直径5mを超える程度で、平面形は不整円形を呈しています。竪穴住居1・2および竪穴住居5・6は建て替えられており、住居を建て替えながら、数十年間継続して生活していたことがわかります。竪穴住居2から竪穴住居1へ、竪穴住居6から竪穴住居5へ建て替えられています。

また、炉については、竪穴住居4・5はともに長径1m程度で、竪穴住居5では炭化材（燃料材）が見つかっています。



写真1 竪穴住居1・2

2. 掘立柱建物（写真2）・・竪穴住居のように地面を掘り込まず、地面を床とするか、高床とした建物で、今回の建物は、他の遺跡の事例から地面を床にした平地建物と考えられます。

全部で5棟見つかっていますが、そのうち2棟は竪穴住居が後世に削られて柱穴だけが残ったものの可能性があります。掘立柱建物1・2は2間1間（約3.7m×約2.3m程度）で、奈良県御所市觀音寺・本馬（かんのんじ・ほんば）遺跡でみつかった晩期中葉（2,750年前）の平地住居とされる形態に類似しています。掘立柱建物3は1間×1間（約3m×3m）で、本調査地の南東400mで昭和54年に県営ほ場整備事業に伴って行われた調査で見つかった、1間×1間の炉を伴う建物に類似しています。

これらの建物の形態の差は、建物の機能差と考えられますが、竪穴住居の機能については明確にはなっていません。いずれの建物も焼土等は確認されていませんが、觀音寺・本馬遺跡や昭和54年調査の下羽田遺跡の例から、平地建物であると考えられます。



写真2 掘立柱建物

3. 土坑墓（写真3）・・地面に橢円形や長方形の穴を掘り、人を直接埋めた墓。

全部で12基見つかっています。平面形は橢円形（小判形）や隅丸長方形などを呈しています。最大で長径約1.6m、短径0.8m、最少で長径約0.9m、短径約0.5mで、長径約1.4mおよび長径1.1mのものが多いことがわかりました。墓の中に人骨や副葬品等はありませんでしたが、埋葬人骨が出土した大津市滋賀里遺跡の事例から考えますと、幼児から大人の

墓であると考えられます。

4. 土器棺墓(写真4)・・地面に穴を掘り、生まれたての子供や大人を骨にし、その骨を土器の中に入れ埋めた墓。

全部で3基見つかっています。埋設方法のわかる2基の土器棺墓は、いずれも高さ約50cmの土器を横に向けて埋めていて、中から人骨の出土はありませんでした。県内で土器棺墓から人骨が出土した例は、滋賀里遺跡では新生児の骨や幼児から大人の再埋葬した骨が出土した例や、多賀町土田遺跡では大人の焼人骨が出土した例があります。このように土器棺墓への埋葬方法は、亡くなった新生児を直接埋葬する例や、幼児から大人を一端骨にしてから再埋葬あるいは火にかける例など、多様性に富んでいます。したがって、今回見つかった土器棺墓がどのような年齢の人が埋葬されたのかは不明です。

また、土器棺墓のうちの1基には、胴部に4cm×3cmの穿孔が認められます。土器棺墓を埋めるにあたり、何らかの儀礼を行っていたようです。



写真3 土坑墓



写真4 土器棺墓

5. 繩文時代晩期末の遺物

遺物の出土は多くありませんが、土器棺として使われた壺や深鉢などの土器、矢の先端に付ける石鏃、植物加工に用いられた磨石類や石器の素材となる剥片などが見つかっています。

(3) 発見された縄文時代晩期末の集落の意義

今回発見された縄文時代晩期末の集落の特徴は、以下のとおりです。

1. 縄文時代晩期末としては近畿地方で初めて、**堅穴住居**と**掘立柱建物**が同じ遺跡から見つかりました。
2. **堅穴住居**や**掘立柱建物**は、地形的に高い南側（旧八日市市・旧蒲生町側）から低い北側（琵琶湖側）に向かって弧状に配置され、住居や建物の南側の一画に土坑墓や土器棺墓などの墓が近接して造られていました。縄文時代晩期末の集落としては、県内で初めて具体的に1つの集落の範囲や大きさがわかる例として挙げられます。
3. 昭和54年度の県営ほ場整備事業に伴う発掘調査を行った地点（縄文時代晩期末の住居、柵、土器棺墓、土坑墓、木棺墓）や平成22年度の県営ほ場整備事業に伴う発掘調査を行った地点（縄文時代晩期末の小穴）では、今回見つかった縄文時代晩期末の集落と同じ頃の住居などの遺構が見つかっていることから、今回見つかった集落と同規模の集落が400m程度離れた場所に点在し、**地域社会**を構成していたと考えられます。

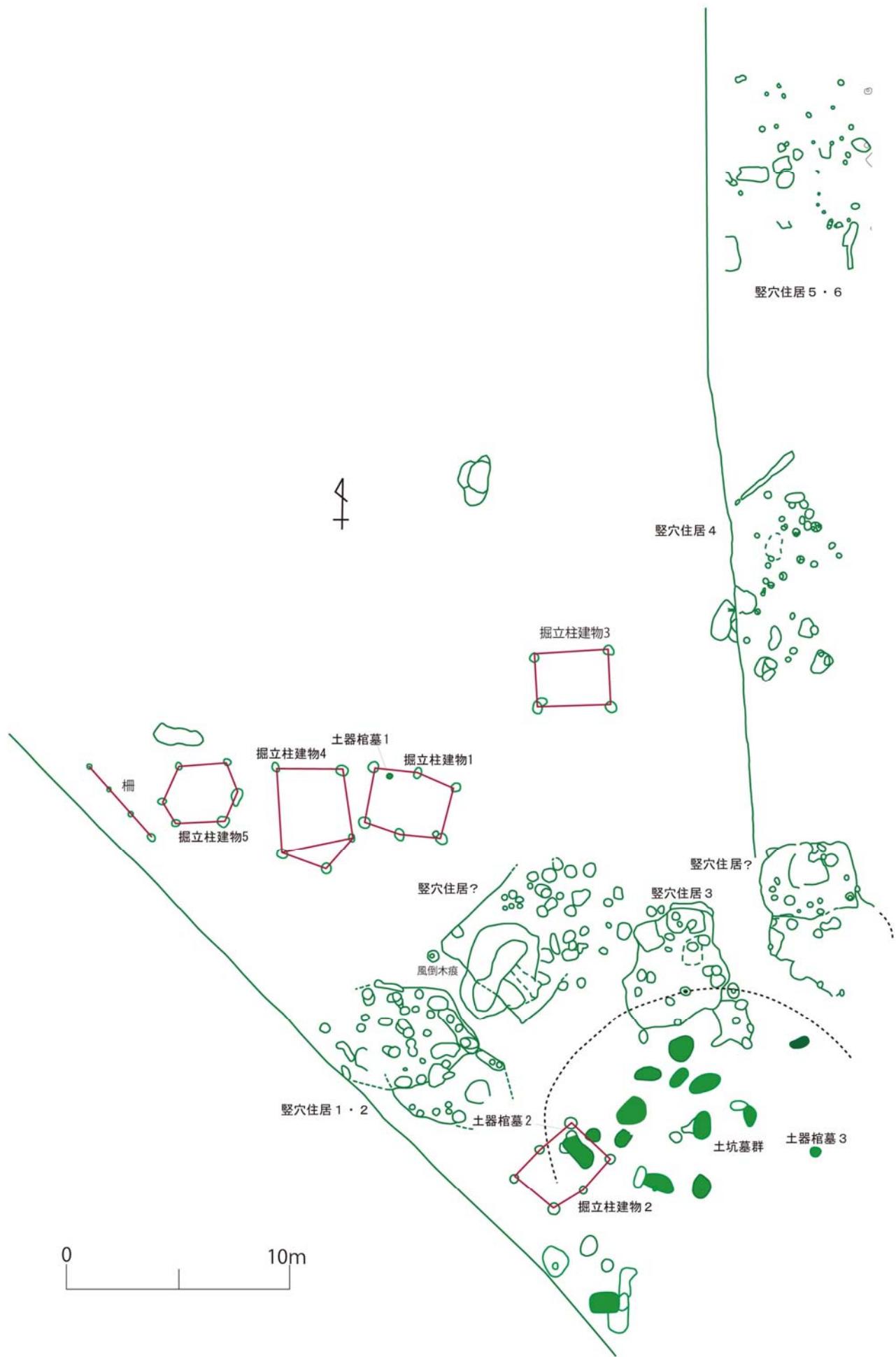
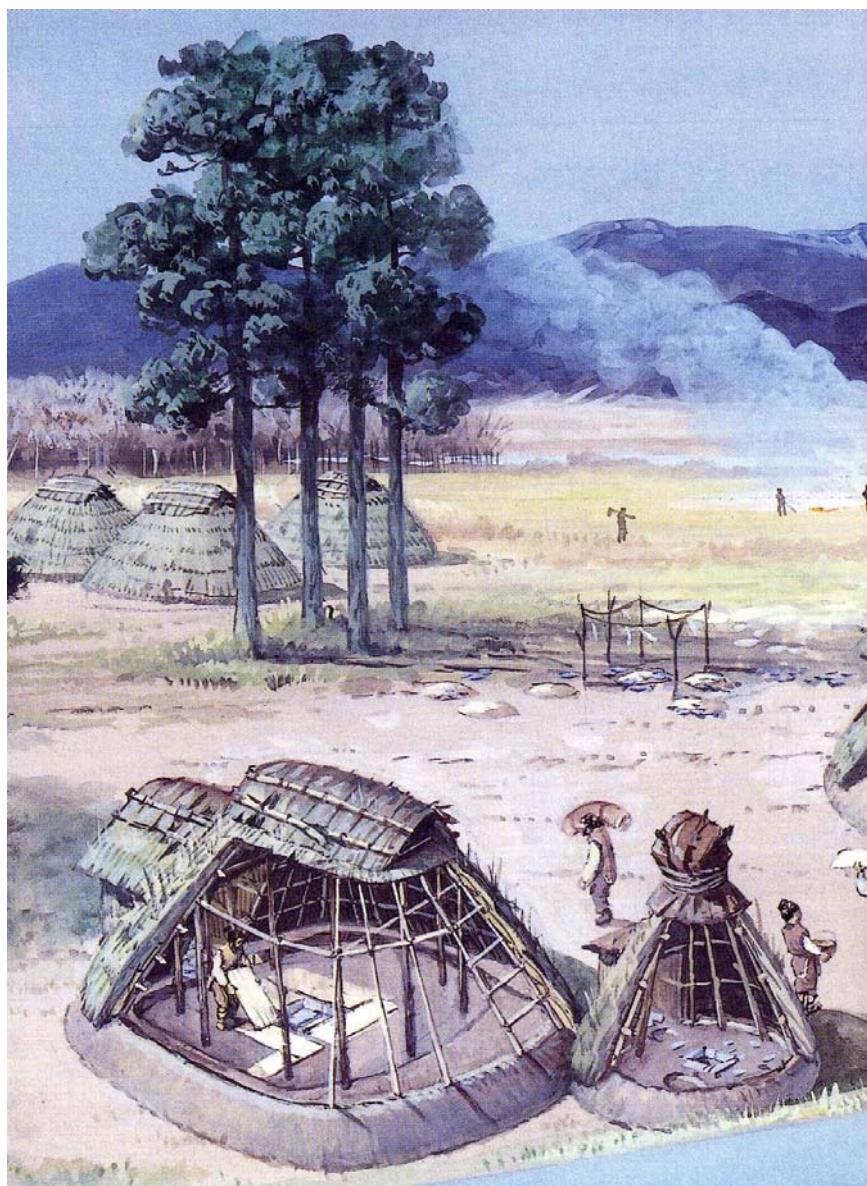


図2 縄文時代晩期遺構配置図



竪穴住居と集落の様子



土器棺墓(再葬墓)



土坑墓

参考資料 下羽田遺跡の復元ではありませんが、泉拓良・西田泰民編『縄文世界の一万年』集英社よりイメージ図として転載いたしました。